オピニオン＆フォーラム

「科学的介護」の落とし穴

インタビュー

標準化されたケア 受け取れぬサイン 生活から乖離する

「科学的介護」を目指す動きが本格化している。現場のデータを集めて分析し、予防や自立に効果があるサービスを普及させる狙いだ。テクノロジー活用で「より少ない人手でも回る現場」を目指す動きも同時進行する。これで本当に「介護の質」は良くなるのか。現場から「介護の深み」を発信してきた実践者に聞いた。

介護施設長 村瀬（むらせ） 孝生（たかお）さん

1964年生まれ。東北福祉大卒。福岡市で定員26人の特養「よりあいの森」と二つの「宅老所」の統括所長を務める。近著に「シンクロと自由」。

吉本美奈子撮影

――より少ない介護職員でサービスの質向上を目指すとして、現場から集めたデータを使って高齢者の自立支援に取り組む科学的介護を国が進めています。

「科学が必要な場合もあるでしょう。でも、データやエビデンス重視のロジックが浸透すると、『見たいもの』しか見ない現場になる。それをおそれます」

――具体的には。

「たとえば、膀胱内の尿量を測る機器があります。それをお年寄りに装着し、尿がたまったとセンサーが知らせてきたタイミングでトイレへ誘導できれば、オムツを使わないで済むようになるかもしれません」

「でも、お年寄りは、尿がたまっていなくてもトイレに行きたがることがよくあります。もし正確に尿量を感知できるセンサーが反応しなければ、そのお年寄りをトイレに連れて行くでしょうか」

――尿は出ないのに、トイレに連れて行く。そんなムダな労力は省けば現場は楽になり、生産性も上がるのでは。

「そうでしょうか。僕らの現場では、『おしっこ』という声を聞いたなら、それにつきあい、なぜ本人の実感がそうなのか考える。その営みが端折られ、『生産性を上げるために』と介護職員が尿量しか見なくなると、老体が発するサインを感受する力が育たない」

「生活は偶然性やいいかげんなものに満ちていて、データやエビデンスで裏付けられた正しさがベースにあるのではない。制度が定める目的や価値、意味が先行する介護は、生活から乖離（かいり）すると思うのです」

――なぜですか。

「ケアで重要なのは『知る』ことよりも『受け止める』ことだからです。『これが嫌だ』というお年寄りの実感を、意味がわからなくても受け止めて、『かわりにこうしよう』という。それも拒絶されたら、また別のやり方を考える。このやりとりを繰り返して、信頼関係が積み上がる」

「介護するために相手を知るという知識の対象として関わるのではない。お年寄りと介護職が2人の体で『今、どうしたいのか』をリアルにつかむ。そのために合意を積み重ねるんです」

――科学的に裏付けのある標準化された介護を実行させれば、質の良くないところも含めて全体の底上げを図れるのでは。

「現場は寛容さを失うのではないでしょうか。標準化されたサービスを計画通りに提供したかどうかだけに重きを置いて評価されると、現場は追い詰められる。評価の矢面に立つ管理者は、計画の遂行を現場に求める。役割を与えられた個々の職員は、まじめであるほど目的達成のために鬼になる」

――鬼ですか。

「目的が先立つ介護は一方的な暴力をはらみやすい。それが組織化されるとなおさらです」

「今の制度は、金銭の誘導による成果主義と懲罰主義の組み合わせ。本質は出来高払いです。制度設計に込められた国の目的に沿って、プラン通りにケアが行われたか否かで報酬が加算、できなければ減算されますから」

「計画するのがダメとは言いません。でも、1日おきに入浴という計画が設けられたら、拒否されてお風呂に入れなかった時、『まあいいか』と計画を手放せるでしょうか？ 企業社会でも、計画を遂行できなければ、責任をとらされているでしょう。介護現場も例外ではありません」

――高齢者に拒否されたからといって、計画した介護をやらないのは楽をしたいだけでは。

「お年寄りの『嫌』を受け止めて、いったん引くことは、その人の意思を尊重したことになりえます。ただ、介護職が引いたままだとネグレクトになる。だから、どうすれば入浴できるかを考えて実践する」

「単なる入浴拒否ではなく、裸になった時のあばら骨やあざが見られたくないとか、拒否する理由は無限にある。その人にしか生じない理由に触れたとき、新しい発見がある」

「相手のサインを受け取り、介護の質向上につなげる。無駄に見えることにも、気づいていないだけで大切なことが潜んでいる。介護する側の目的を遂行するために集められたデータで効率が上がるほど、唯一無二の人生を生きた老体は単純ではありません」

■ ■

――では、どうすべきだと。

「生身の体が今ここで求めることに応じられる仕組みにシフトする必要を感じます。今、食べたい。今、うんこしたい。今、眠りたい……。そうした求めには今、対応しないと、取り返しのつかない傷を心身に残しかねない」

「そうした事態を避けるなら、今の生活を計画で縛るのではなく、今ここで必要なことに対応するため計画を手放すことができる現場の裁量が大切になります」

「一方で経済社会は、将来の目標を達成するために逆算し、いつ何をすべきか計画することで成り立っています。正月のおせち料理を初秋に予約販売するのが一例で、未来を先取りするほどにもうけが出る。将来のため今を犠牲にすることをいとわない。今ここの対応から出発するケアとは、成り立つロジックが正反対なんです」

――個々の職員の感受性と裁量を生かして素晴らしい実践ができる場は限られる気がします。

「入居者に対して職員数が少ないと、働く側の生身の限界を超えてしまう。職員が疲弊するのを避けるためには、センサーなどの最先端技術で人の限界を補完せざるを得ない現実はあります」

「ただ、人間の能力の限界を文明の利器で補完し拡張し続けることで、本当に幸せが得られたのか。立ち止まって考える時ではないでしょうか。人間の不完全さや弱さを排除せず、許容する力が失われていると思います」

――社会を維持し、経済を回すためには仕方がないのでは。

「この社会は経済発展と引き換えに、生産性がないとみなされたお年寄りを効率よく介護するために施設を用意しているように見えます。『認知症』であれば、抑制し隔離されても仕方ないという暗黙の了解がある」

「全体の利益のために、一人の人間の存在を犠牲にしても仕方ないという考えが、私たちの骨の髄まで染みてはいないでしょうか」

「足手まといな者のリストの1番目にいる人を犠牲にすれば、2番目の人が繰り上がって次の犠牲となります。それを繰り返すだけの社会は、ほどなく弱体化する。日本社会はその状態にあると思います。それが私たちの望む経済でしょうか」

■ ■

――私自身も、若者の数が大きく減り高齢者の数がピークになる2040年代に後期高齢者になります。どんな老いが待っているか不安で息苦しいです。

「介護現場でレクリエーションやリハビリのための運動をします。その時、健康寿命を保ち、自立した生活をする『未来への投資』という発想に立つとしたら、楽しくなりません」

「今苦しいのは、未来をもっと楽にしたいと思っているからです。未来にある納期に間に合わせる計画のため今を差し出す。それよりも、今ここの幸せをつかみとれたら、どれだけ楽になるか。今を謳歌（おうか）できる人生や社会に作り直せるかどうかですね」

――どう老いていけばもっと楽になれるでしょう。

「年をとれば老眼になるとか、足腰が弱くなるとか機能が衰える。たとえ医療や技術で補完してもやがて限界を迎えます」

「自分の体をねぎらいながら、その変容に応じて老いを堪能できる生活に変えていく。そして生身の限界を踏まえ、合意を積み重ねる共同体になっていく。それが持続可能な社会のありようではないでしょうか」

見裸　実どだま人め　いと　例さをしまれいま　れたっ度わよ　職な　ーるら遂価るうーな　の質準　意を人でと

吉本美奈子撮影

介護施設長　村瀬（むらせ）　孝生（たかお）さん

1964年生まれ。東北福祉大卒。福岡市で定員26人の特養「よりあいの森」と二つの「宅老所」の統括所長を務める。近著に「シンクロと自由」。

られたくないとか、拒否する理由は無限にある。その人にしか生じない理由に触れたとき、新しい発見がある」

「相手のサインを受け取り、介護の質向上につなげる。無駄に見えることにも、気づいていないだけで大切なことが潜んでいる。介護する側の目的を遂行するために集められたデータで効率が上がるほど、唯一無二の人生を生きた老体は単純ではありません」

■　■

――では、どうすべきだと。

「生身の体が今ここで求めることに応じられる仕組みにシフトする必要を感じます。今、食べたい。今、うんこしたい。今、眠りたい……。そうした求めには今、対応しないと、取り返しのつかない傷を心身に残しかねない」

「そうした事態を避けるなら、今の生活を計画で縛るのではなく、今ここで必要なことに対応するため計画を手放すことができる現場の裁量が大切になります」

「一方で経済社会は、将来の目標を達成するために逆算し、いつ何をすべきか計画することで成り立っています。正月のおせち料理を初秋に予約販売するのが一例で、未来を先取りするほどにもうけが出る。将来のため今を犠牲にすることをいとわない。今ここの対応から出発するケアとは、成り立つロジックが正反対なんです」

――個々の職員の感受性と裁量を生かして素晴らしい実践ができる場は限られる気がします。

「入居者に対して職員数が少ないと、働く側の生身の限界を超えてしまう。職員が疲弊するのを避けるためには、センサーなどの最先端技術で人の限界を補完せざるを得ない現実はあります」

「ただ、人間の能力の限界を文明の利器で補完し拡張し続けることで、本当に幸せが得られたのか。立ち止まって考える時ではないでしょうか。人間の不完全さや弱さを排除せず、許容する力が失われていると思います」

――社会を維持し、経済を回すためには仕方がないのでは。

「この社会は経済発展と引き換えに、生産性がないとみなされたお年寄りを効率よく介護するために施設を用意しているように見えます。『認知症』であれば、抑制し隔離されても仕方ないという暗黙の了解がある」

「全体の利益のために、一人の人間の存在を犠牲にしても仕方ないという考えが、私たちの骨の髄まで染みてはいないでしょうか」

「足手まといな者のリストの1番目にいる人を犠牲にすれば、2番目の人が繰り上がって次の犠牲となります。それを繰り返すだけの社会は、ほどなく弱体化する。日本社会はその状態にあると思います。それが私たちの望む経済でしょうか」

■　■

――私自身も、若者の数が大きく減り高齢者の数がピークになる2040年代に後期高齢者になります。どんな老いが待っているか不安で息苦しいです。

「介護現場でレクリエーションやリハビリのための運動をします。その時、健康寿命を保ち、自立した生活をする『未来への投資』という発想に立つとしたら、楽しくなりません」

「今苦しいのは、未来をもっと楽にしたいと思っているからです。未来にある納期に間に合わせる計画のため今を差し出す。それよりも、今ここの幸せをつかみとれたら、どれだけ楽になるか。今を謳歌（おうか）できる人生や社会に作り直せるかどうかですね」

――どう老いていけばもっと楽になれるでしょう。

「年をとれば老眼になるとか、足腰が弱くなるとか機能が衰える。たとえ医療や技術で補完してもやがて限界を迎えます」

「自分の体をねぎらいながら、その変容に応じて老いを堪能できる生活に変えていく。そして生身の限界を踏まえ、合意を積み重ねる共同体になっていく。それが持続可能な社会のありようではないでしょうか」

心理・社会的側面も　データに加えて

東洋大准教授　高野（たかの）　龍昭（たつあき）さん

1964年生まれ。医療・高齢者介護分野でのソーシャルワークの実務を経て現職。専門は介護福祉学。

「LIFE」（＝参照）は、医療・介護分野でのデータヘルス改革の一環といえます。こうしたシステムは1990年代以降の米国で先行し、当時、日本の老人保健施設などで働いていた私は注目していました。入院期間の短縮で従来なら病院にいた患者さんが介護施設に移り、そこで適切な介入ができなければ寝たきりや認知機能の悪化が起きる。医療では取り組まれている標準化が介護でも必要と感じていました。

日本の高齢者介護は、人間的な関わりを重視してきた一方、属人的な経験が頼りで再現性に乏しいとの批判があります。根拠に基づき標準化できれば、介護への信頼性を高めるでしょう。また、標準的なサービスによって「成果」を挙げているかを見てサービスの質を評価することも期待できます。

ただし、懸念もあります。一つは、データ収集の対象が、身体や認知、口腔（こうくう）・栄養などの心身機能が中心で限定的なこと。社会環境や対人関係、本人の価値観、意欲や思いなどのデータはほぼ見当たりません。こうした心理・社会的側面が「状態」を変化させるケースも少なくないのです。

もう一つは、自立支援に対する視点の偏りです。他者や制度の助けなしに生活する「自助的自立」ができるかどうかという「結果」によって報酬が増減すれば、事業者が「良くなりそう」な利用者だけを選別して、「悪化しそう」な人を受け入れない「クリームスキミング」が起きかねません。

社会制度や第三者の助けを借りながら、自身で支援策を選択し自己決定をしながら生活する「依存的自立」への支援の評価や標準化は相当に難しいと思います。今後は「主観的幸福感」「対人関係」「社会参加」などのデータもLIFEに加え「介護の科学化」につなぐべきです。

（聞き手はいずれも浜田陽太郎）

介護分野での科学とテクノロジー活用

2006年度の介護保険制度改正以降、要介護状態になることを防ぐ「介護予防」や「自立支援」が強調され、見守り機器などテクノロジーの活用も推進されてきた。21年度に「科学的介護情報システム」（LIFE）の運用開始。介護事業所からデータを集めて分析し、どのようなサービスにより状態改善や悪化防止ができるのかフィードバックする。このシステムを活用し、おむつ使用が「あり」から「なし」に改善されるなどのアウトカム（結果）で報酬が加算される仕組みもある。

論

難しい「毒舌」の使い方　傷つく人はいませんか

漫才日本一を決める昨年末の「M－1グランプリ」で、毒舌漫才を展開したコンビが優勝しました。最近、あまり見かけなくなった毒舌による笑いが、なぜ今回は受け入れられたのか。毒舌のあるべき姿とは。元芸人で社会学者の瀬沼文彰・西武文理大学准教授(44)に話を聞きました。

元芸人で社会学者　瀬沼文彰さんに聞く

毒舌の笑いは、大きく三つに分類できます。一つ目は、周りが言葉にできなかったことを表現する「共感」、二

す。特に外見に触れるネタは避けられています。一般の人にとって、笑いの教科書はテレビです。テレビの影響で、学校や職場などでも毒舌は少なくなっているのではないでしょうか。

ただ本来、毒舌は悪いことばかりではありません。本音で語れる人間関係を作るのに有効な面が

私の視点

駐日米国大使　ラーム・エマニュエル（Rahm Emanuel）

日米の協力関係
り、自由で開かれ
平和と繁栄の礎と
同盟は共通の利益
向けた連携を、域
く、今や空の上で
宇宙はその国
だ。月、そして火
活動において、日
トナーはない。日
数十年分の蓄積を
提携関係を、確固
まずバイデン大
に、日本が国際宇
5月に訪日した
の支援を30年まで
束した。米航空宇
と宇宙航空研究
A）の宇宙飛行士
ーションという極
後も技術革新を続
続いて両国は11
有人拠点「ゲート
り決め文書に署名
て小さな一歩では
へとつながる。バ
べたように、日本
ASAと共に月を
そして、今年1
米時に、日米宇宙
組み協定」への署
われた。宇宙技術
探査まで、日米は
さらなる協力を進
これら三つの